

夢の途中

佐藤 幸枝

近頃は「人生一〇〇年時代」と言われます。そんな長い人生、途中で何が起きるか分からないものです。

私は昭和10年生まれ、京都育ち。娘時代は人並みにスキーに戯れたり自動車の運転免許を習得したり、青春を満喫していました。

私の若い頃、昭和30年代は男が働いて家計を担い、女は家事や育児して家庭を守る。そんな考え方が社会に根強くあり、女性は就職よりも結婚が優先された時代でした。私も親戚の口利きで、縁あって岡山の人とお見合いをし、めでたく結婚という運びになりました。

世間では結婚はゴールのように言われますが、京都で生まれ育った私が見知らぬ土地岡山で暮らすなんて考えもしなかったこと。人生の新たなスタートのような思いでした。

嫁ぎ先は商売上手でしっかり者の義母が采配する貸し衣装屋。だれに対してもやさしく温厚な夫との生活。おまけに出産、子育てと慣れない多忙な日を送り、20年がまたたく間に過ぎ、ふと気が付くと当時84歳の義母が一年ほど寝付いて他界、夫はその後を追うように肝硬変の悪化で2年後に亡くなりました。子供たち二人はそれぞれ就職をして自活、気がつくと、私一人の生活になっていました。

当時はバルブもはじけて不景氣風が吹き始め、貸し衣装

業界も、小さな専門店では商いが出来ないほどの改革があり、専門知識の無い私が考えた末、陶器類や布類、何でも扱えるギャラリーへの転身が無謀にもひらめいたのです。60歳にしてまた再出発です。

思い返してみれば、作家ものを扱うことがどれほど大変なのか分かっていなかったのでしょうか、苦労しました。作家を探しに京都へ、ギャラリーの勉強に大阪へと、それは、それはよく走り回りました。とても充実した楽しい夢のような日々でした。

ギャラリーのことが分かるようになった今では、人々との出会い、人と物(作品)との出会いを楽しんでいます。老いると欲が出るのでしょうか、この楽しい空間を文章に表現したいという思いからエッセー教室にも通い、よい仲間を得て文章力を磨いています。

このように途中でいろいろ道草をくついているものですから、おそらく夫はゴールでさぞ待ちくたびれていることでしょう。そこで一句。

亡夫(つま)の声いつもどこかに冬ぬくし

お父さん、もうしばらくお待ちくださいね。

作者 佐藤幸枝

題名 夢の途中

原典 山陽新聞夕刊エッセー 掲載日 2019.3.7